

2008年1月18日提出

村井科研

報告書原稿

## 濟州島における連陸浦と『耽羅巡歴図』のなかの港

高橋公明

### 1. 島を見る目

2、3年前、『港町の世界史』をいう3巻本の企画があり、そのなかで「島に生きる」という観点から濟州島など島の世界について短文を書くようにというありがたい注文があった。ところがよく考えてみれば、「島に生きる」、すなわち島の視線で世界を見るということはそんなに簡単に描ける話ではない。そこを何とかごまかし、外部から島を見たことによって成立した資史料——それらのほとんどは権力側のもの——を素材に検討したことがあった。

そこでは基本的に、権力側が島をどのような関心から眺めたのか、何を管理したかったのかを確認し、それから漏れてくる言説をテキストのなかから拾い上げるという複雑な作業をしたが、十分な分析とは言えず、申し訳ない気持ちで出版社に原稿を送ったことを覚えている<sup>1</sup>。ここではその反省をふまえ、より簡単に、テキストの作成者の関心——権力は島をどのように見ているのか——を中心に検討する。

朝鮮半島西部から南に、九州北部から西に、そして中国沿岸から東に濟州島は位置している。この東アジアの海域世界のランドマークのような濟州島は、これまで外部からさまざまな視線で観察されてきた。本稿では、朝鮮半島からどのように見られてきたのか、二つの見方を素材にして検討する。一つは連陸浦という考え方である。これは長年、濟州島の海に関する歴史や民俗に深い関心を持続してきた高光敏の説明概念で、濟州島の港のなかで、朝鮮半島と深い交通関係があるところを言う<sup>2</sup>。濟州島には古くから大小の多くの港が存在していたはずであるが、陸地＝朝鮮半島と交通関係がある港は、おそらく比較的大きな船が係留でき、かつ朝鮮半島に向きあって位置しているところと考えられ、そのように記述されている港に注目するのである。二つは『耽羅巡歴図』に描かれた港および付属した諸施設に焦点を合わせることである<sup>3</sup>。『耽羅巡歴図』にはさまざまな港および付属施設が描かれている。それらはいずれも権力にとって掌握し、管理しなければならない場

所と考えられ、そのように描写されている港に注目するのである。この作業と現地での観察を通じ、このような港がどのような自然環境・立地のなかにあるかも確認する。

## 2. 連陸浦

高光敏は濟州島の港について歴史地理学的かつ民俗学的に検討し、そのなかで「連陸浦」という範疇を設定した。連陸浦とは、読んで字のごとく陸に連なる港のことである。濟州島の人が陸地と言えば、朝鮮半島のこと、ここでは濟州島の港のうち、朝鮮半島との航路が成立するところを指す。

高光敏は李増『南槎日録』<sup>4</sup>から、「本島、正在南海中。往来之船、遇北風入来、遇東風出去。館、正在州東北界、出陸諸舡、皆待風于館下及禾北浦」あるいは「旧時、待風無定处、在東則禾北浦、於等浦、朝天浦、遇東風向陸、泊白道、館頭、珍島等。在西則朝貢川、涯月浦、遇西風向陸、泊於蘭浦、館頭、珍島、草島等处」を引き、連陸浦の根拠としている。前半で挙げられているのが「館」すなわち朝天浦と禾北浦、後半で挙げられているのが、濟州牧を中心に東に禾北浦、朝天浦、於等浦、西に朝貢川、涯月浦の五つの港である。

五つの港のなか、前半の引用が示すように朝天浦と禾北浦はより重要であった。『南槎日録』の同日条に、「自乙卯以後、私船任意出入、島中避役者、往々乗船出陸。故只於朝天・禾北浦許令放船」とあり、濟州島の人々が課役逃れのために島外へ脱出するのを防ぐために、1675年以降は出港地を朝天浦と禾北浦に限ったとある。これが実効ある政策であったか否かは不明であるが、統治する側からすればこの二つの港が重要であったことは間違いない。

濟州島と外部を結びつける港に焦点を合わせて設定した連陸浦という範疇は、海域世界を検討する上できわめて有効な見方である。この高光敏の提案にしたがって、前述の「島に生きる」でも紹介したように、いくつかの濟州島に関する古い記述を検討し、連陸浦あるいは、さらに広く外部とつながりを持った港を確認してみよう。

『高麗史』「地理」巻57の末尾に「耽羅県」に関する記述があり、その最後の「楸子島」の二行割注に以下のような記述がある<sup>5</sup>。

凡往耽羅者、發羅州、則歷務安大堀浦・靈岩火無只瓦島・海南於蘭梁、凡七晝夜至楸子島。發海南、則從三寸浦、歷巨要梁・三内島。發耽津、則從軍營浦、歷高子黃伊露瑟島・三内島。皆三晝夜至楸子島。右三处、舟船皆經此島、過斜鼠島・大小火脱島、至于涯月浦・

朝天館。蓋火脱之間、二水交流、波濤洶湧、凡往来者、難之。

この説明文の特徴は、朝鮮半島南西部の全羅道からどのような経路をとって済州島に至るかという立場から記述されていることである。「羅州」「海南」「耽津」のいずれから出発しても、「楸子島」を経由して済州島の「涯月浦」か「朝天館」に至るという説明のしかたである。この説明のしかたは言うまでもなく、中心からの視点からなされているが、この知識自体は済州島と全羅道の間を往来する人々との接触抜きには成立しない。いずれにせよ、高麗の時代に、済州島北岸の東側の朝天浦と西側の涯月浦が港として認知されていたことを示している。なお、その航路に関する記述は、以後の地理志でも踏襲される

「地理」ではないが、『高麗史』列伝のところに済州島の港に関する別の記述がある<sup>6</sup>。金方慶が三別抄を討つために、1273年に160艘の船を率いて済州島に向かい、楸子島から「咸徳浦」に上陸したとあり（巻104）、また、1374年に崔瑩が済州島の元の残党を中心にした反乱を討つために戦艦314艘、士卒25600人の大軍を率いて「明月浦」ではじめに戦っている（巻113）。これもまた済州島北岸の「朝天館」より少し東にある「咸徳浦」と、「涯月浦」よりさらに西にある「明月浦」が記載されている。『高麗史』のなかでは、済州島の北側に位置する西から東へ、明月浦・涯月浦・朝天浦・咸徳浦の四つの港が挙げられていることになる。

『朝鮮王朝実録』「世宗地理志」巻151においても、『高麗史』とほとんど同様の航路に関する記述があるが、こちらは二行割注ではなく、本文にあり、これについての情報の評価が上がっている<sup>7</sup>。内容にほとんどの違いはないが、地名で海南が海珍に、耽津が康津に変化しているが、これはいずれも行政区画の統合があったためで、実質的な変化はない。したがって例示されている港は『高麗史』と同じで「涯月浦」と「朝天館」、すなわち朝天浦である。

以上、古い時代の記述を見ると、朝鮮半島から見て朝天浦と涯月浦がもっとも重要な港であることがうかがえる。また明月浦と咸徳浦にも多くの戦艦などが入港した実績があり、上記の二つについて重要な港であった。これらを『南槎日録』の五つの港と比べてみると、両者と共通するのが朝天浦と涯月浦で、古い時代の明月浦と咸徳浦は新しい時代の禾北浦、於等浦そして朝貢川にとって代わられたことがわかる。また、不思議なことであるが、済州島の政治体制の中心は済州牧であるが、そこに付属する港である健入浦はいずれの史料にも連陸浦として記述されていない。

### 3. 「漢拏壯矚」

『耽羅巡歴図』は、1702年、濟州牧使兼濟州兵馬水軍節制使（濟州における文官および武官の頂点にたつ責任者）である李衡祥が、慣例に従って6月から12月まで濟州島各地を巡歴し、その地勢や軍・民の様子などを画工の金南吉に命じて1枚の序、1枚の絵地図そして40枚の絵によって集成したものである。その第一枚目は「漢拏壯矚」（濟州島の展望の意）と題した濟州島の絵地図である（口絵1）。「漢拏壯矚」を含め、『耽羅巡歴図』については、これまでもいくつか検討してきたので、ここでは絵地図のなかに赤色の長方形の短冊に黒色の字が書かれているところに注目する。

赤く着色されているのは、「濟州牧」、「大静県」、「旌義県」という濟州島を分ける3つの行政単位と、「濟州牧」から時計回りに「禾北」、「朝天」、「別防」、「首山」、「西帰」、「慕瑟」、「遮帰」、「明月」、「涯月」の9ヶ所で、合計12か所になる。これらのうち、朝鮮半島に面した側、すなわち北岸に位置する地点に注目すると、「濟州牧」から東に向かって「禾北」、「朝天」、「別防」の3か所、西に向かって「涯月」、「明月」の2か所が該当する。以上の5か所についてどのように描かれているか検討する。

「禾北城操」は禾北鎮の城壁内での軍事訓練の様子を描いた1枚で、絵の欄外の説明文に「城丁軍一百七十二名」とある（図1）。禾北鎮の東には「烟台」が、西には三重の入り江をもつ「別刀浦」が描かれ、そのなかには屋形と帆柱をもつ立派な船11隻が停泊している。なお入り江を構成している堤を「城滄」としており、人工的に強化された波止場と考えられる。また禾北鎮と「別刀浦」を囲むように「別刀浦里」の集落が配置され、そのなかに「碑閣」（この地に赴任した官僚の功績碑）がある。



図1 「禾北城操」

なお「別刀浦」は禾北浦のことである。

防御施設、煙台、大きな船が停泊可能な入り江、集落などで構成されており、この絵図からだけでも重要な港、さらには港町であることが認識できる。なお、『耽羅巡歴図』よりも少し早く成立した地誌である李元鎮『耽羅志』（1653年）では、禾北浦に水戦所が<sup>8</sup>、また『増補耽羅誌』（1750年前後？）では防護所



図2 禾北浦の堤から港内と城壁を見る。

があるとされている<sup>9</sup>。したがって、停泊中の船も戦艦を描いたものかもしれない。現地調査によれば、三重の入り江に相当するところはコンクリートの堤防になってはいるが比定が可能で、城壁にあたるものは石垣として残されており、内部は駐車場になっている（図2）。

「朝天操點」は朝天浦の城壁内外での軍事訓練の様子を描いた1枚で、欄外の説明文に「城丁軍四百二十三名」とあり、「禾北鎮」より規模が大きい(図3)。また、「牧子保人并八十七名、馬五百五匹」あり、以下の絵柄と対応する。「戀北亭」や「軍器」が含まれている朝天鎮を中心に、東には「烟台」と「朝天館里」、内陸には多数の馬、朝天鎮の西に接して「館浦」、すなわち朝天浦などが配置され、禾北浦と同じ船が5隻描かれている。なお堤状の地形に「礁」の字が多く付されており、この入り江は禾北浦とは異なり、人工的なものではないようである。

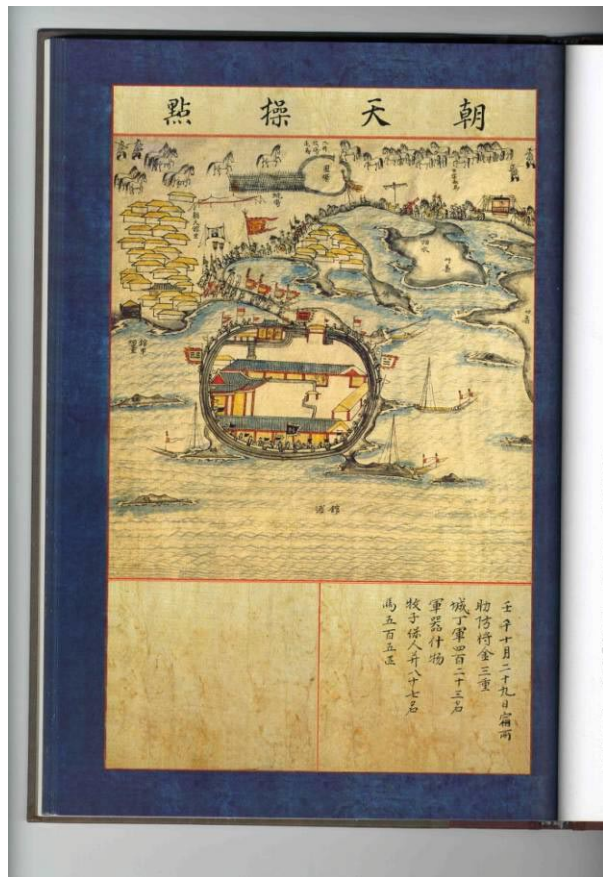


図3 「朝天操點」



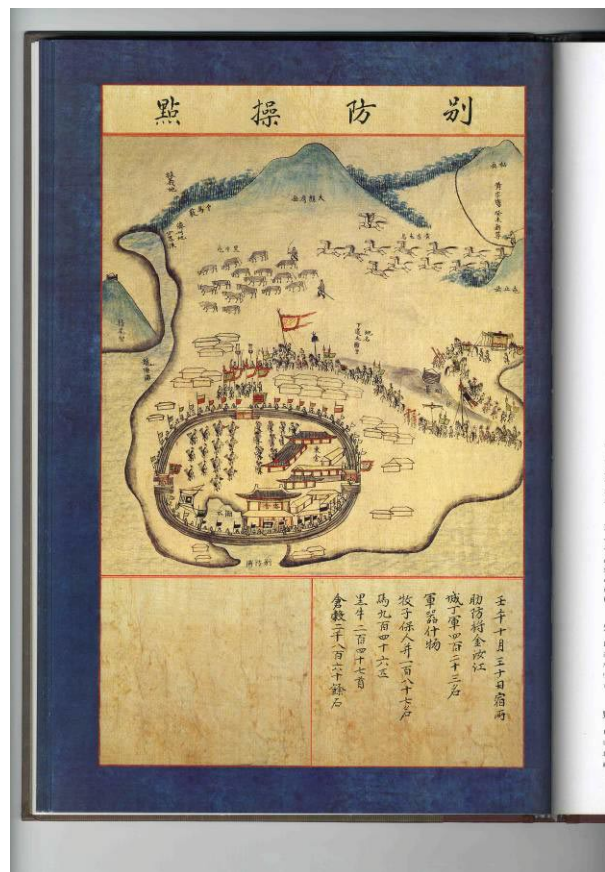
禾北浦と同じく重要な港、さらには港町であると認識できる。ただし、天然の入り江、船数の少なさなど禾北浦よりも比較的その重要度は低く表現されている。その反面、軍事訓練の様子はかなり大規模で、数字でも明確なように、多数の馬とあいまって、政治軍事的な重要性が強調されている。



それは地誌での記述とも対応している。『耽羅志』では、城郭、防護所、水戦所のすべてがあるとされている。ただし、『増補耽羅誌』ではそのような記述はない。なお、恋北亭の基礎部分と煙台は、現在、復元保存されている（図4）。

図4 恋北亭は、流人が北方にあるソウルからの知らせ、あるいはソウルへ帰る日を待ち望むところの意。

「別防操點」は別防鎮の内外での軍事訓練の様子を描いた1枚である（図5）。軍事訓練は「朝天操點」のそれに負けないぐらいの規模で、「城丁軍四百二十三名」「牧子保人并一百八十七名、馬九百四十六匹、黒牛二百四十七首」とある。別防鎮を囲んで小規模の集落と、内陸には黒牛の群と馬の群が配置されている。別防浦は小規模で、鎮の内部に入り江が食い込んでいるのが特徴である。また城山日出峰、濟州牧と大静県の境界も絵の周縁に配置されており、空間的に広い範囲を視野に入れている。



「別防試射」は別防鎮内での試射の様子を描いた1枚で、「各面教射長十員、射員二百八人」とある（図6）。別防鎮の

図5 「別防操點」

内部の建物の配置は前者と似ているが、鎮内部に食い込んでいる入り江の近くに置かれた的に矢を射る様子と馬が多く描かれていること、前者では兵が配置されていた城壁に人が配置されていないことが前者と異なる。また、濟州島の東端にある牛島が新たに配置され、別防鎮の周辺の描き方も前者と異なる。

別防鎮を画材にして2枚描かれており、この地の政治的な重要性が明示されているが、別防浦は小規模で船は1隻も描かれておらず、港の機能の低さが表象されている。現地で見ても、立派な城壁は再建保存されているが、城壁のどのあたりから入り江が鎮の内部に食い込んでいたのかは不明であった(図7)。

なお、別防鎮は「正徳庚午」(1510年)に牧使張林が倭船の停泊地が近くの牛島にあったので、金寧防護所をここに移して、別防と命名したとされる<sup>10</sup>。別防鎮より少し西に戻ったところに魚登浦(於等浦)があり、高光敏によれば、きわめて良港で、別防鎮に属する軍船を停泊させていた<sup>11</sup>。先に述べたように、朝鮮後期には、於等浦は5つの連陸浦の1つとして挙げられている。その経緯が示すように、別防鎮のある地域は、港があったために発展したのではなく、初めから防御施設として設定されたものである。それが絵に反映しているのである。この点が禾北浦・朝天浦とは明確に異なってい

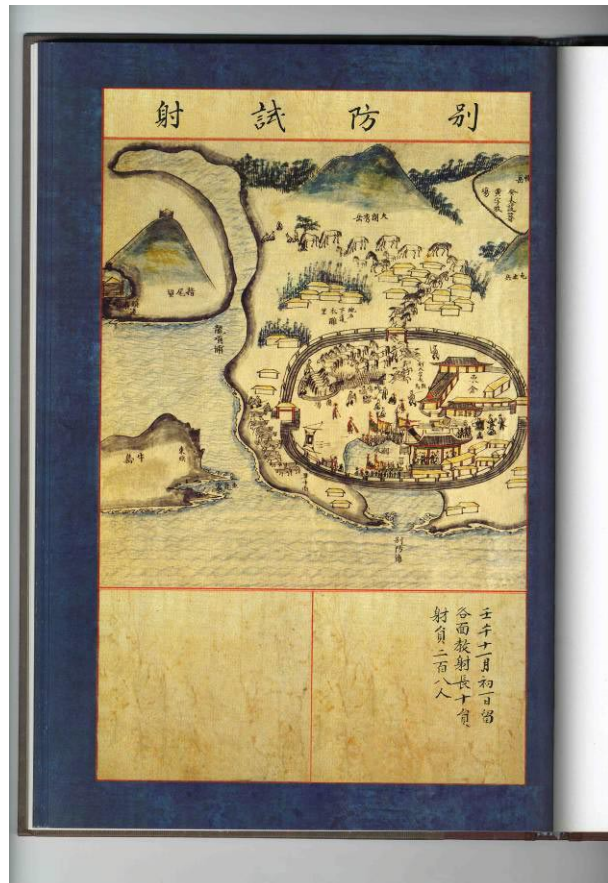


図6 「別防試射」



図7 別防鎮の城壁



る。

「漢拏壯囑」のなかで、濟州牧の西に位置し、赤く書かれた重要な場所として、「涯月」、「明月」の2か所がある。「涯月操點」は涯月鎮の城壁内での軍事訓練を描いた1枚で、「城丁軍二百四十五名」「牧子保人并一百八十一名、馬一千四十匹」とある（図8）。涯月鎮の西側に沿って「涯月浦」があり、入江が奥まで食い込んでいる。入江の対岸には「烟台」が、涯月鎮からかなり東に「高内浦」があり、その内陸の山頂には「高内望」（烽燧）が描かれている。また、それらの背景には多数の馬と「涯月里」が配置されている。なお、港内には1隻の船も停泊しておらず、港外に1隻の帆かけ舟が描かれているだけである。

馬の多さは「朝天操點」におけるそれ以上であるが、港の描き方は全く比較できないほど貧弱である。なお、『耽羅志』では城郭と水戦所があるとされている。もちろん、城郭は涯月鎮のことで、現在、その一部は涯月初等学校の敷地を囲んでいる（図9）。また、絵と異なり、涯月浦は禾北浦と同様、三重の石垣の堤で構成されており、かつて水戦所があったとしてもおかしくない。

「明月操點」は明月鎮の城壁内での軍事訓練を描いた1枚で、「城丁軍四百十二名」「牧子保人并一百八十五名、馬一千六十四匹」とある（図10）。明月鎮の内部に多くの兵士、馬、建物軍が描かれ、鎮の東北の海岸に「馬頭烟台」、海岸と鎮の

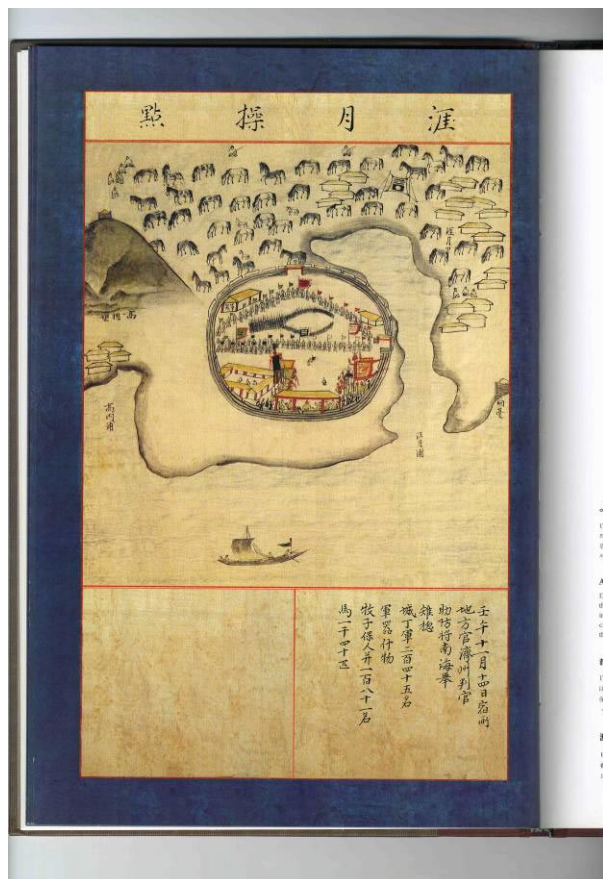


図 8 「涯月操點」



図 9 涯月鎮の城壁と涯月初等学校



間に水田、鎮の西北に半島が突き出て、その入り江に船とともに「獨浦」が、鎮の西側に「月溪果園」、「水流川村」、城壁を囲むように内陸側に多数の馬、鎮の南方に「晩早望」、「獨浦」の対岸に「飛揚島」などが配置されている。

「明月試射」は明月鎮内での試射の様子を描いている1枚で、「右面教射長十七、射員一百四十一」とある（図省略）。明月鎮の目立つところに大きな的を置き、多くの射員が矢を射る順番を待っているという構図である。全体の構成は「明月操點」とほぼ同じだが、城外に多く描かれていた馬は姿を消し、集落の家々だけが残り、海のなかも船の姿はない。

以上の2枚の明月鎮の描き方としては、東方の別防鎮に対応しており、政治軍事的に重視していることを表象している。別防鎮においても港の描き方は簡単なものであったが、ここではさらにその存在感は薄いものとなっている。たしかに「獨浦」が控えめに描かれているが、明月鎮の港のようには見えない。はたしてこの「獨浦」は明月浦なのだろうか。

明月浦をどこに比定するかは簡単ではない。先に述べたように、高麗末期

の1374年、崔瑩が濟州島の元の残党を中心にした反乱を討つために大軍を明月浦に上陸させており、おそらく大きな港であった。『新增東国輿地勝覽』の記述でも、濟州牧の「西六十里」に「明月浦」はあり、かつ飛揚島に倭船が碇泊するという理由で明月浦防護所が、

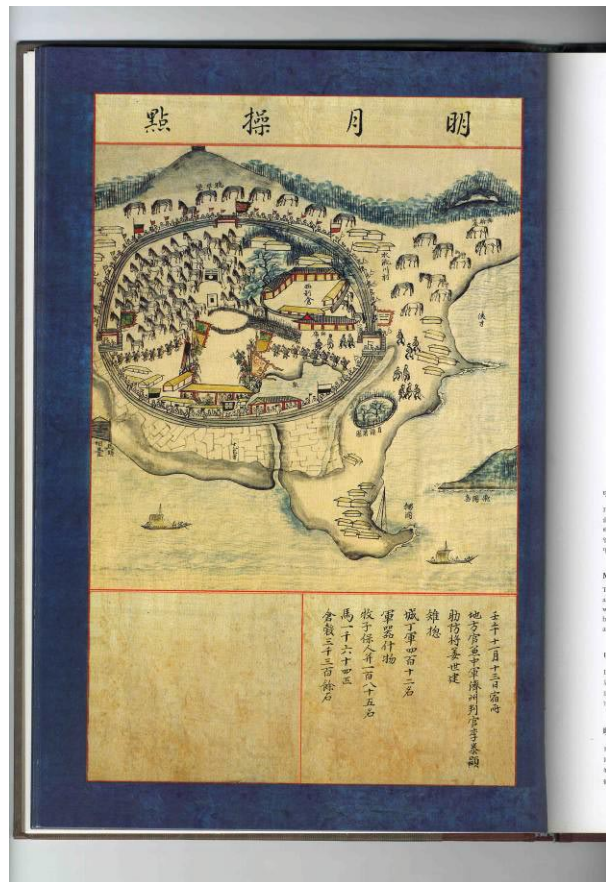


図 10 「明月操點」



図 11 明月鎮の城壁から飛揚島を望む

別防浦と同じく1510年に設置され、かつ「明月浦口水戦所」も設置されていた<sup>12</sup>。もちろん朝鮮後期になっても「明月浦」という港は地誌に記述されている。しかしながら、連陸浦としては挙げられておらず、現在のどこが明月浦かは自明ではない。以下に示すように、高光敏はそれを現在の翰林港と比定している<sup>13</sup>。

『海東地図』は1750年ごろに朝鮮で集成された膨大な地図帳だが、そのなかに「済州三県図」というものがある。この地図は、『耽羅巡歴図』の「漢拏壯囑」とは細部において描き方に大きな違いがみられる。この「済州三県図」には、明月鎮をはさむ東西に2つの港に流れ込む2つの川（済州語で뉘、네）を描いた。西側のものを月溪川、そして東側のものを馬頭川と呼び、馬頭川の下流に馬頭浦の表示が見られる（筆者：地図のなかでは月溪川の河口に馬頭浦の字が見えるが、当然、馬頭川の河口に馬頭浦があるべきである）。この馬頭川を現地では순두네（スンドゥネ、馴頭川）と呼び、いつの間にか馬頭川と書くようになった。この近辺で馬頭浦以外に軍船を停泊できる港はないので、これが歴史上の明月浦となる。なお、『耽羅志』の「明月浦」と『南槎録』の「馬頭浦」は、どちらも「済州城の西側六十里にある」という点もこの推測を補強する根拠となる。この馬頭浦は現在の翰林港に該当するが、5年ほど前に埋め立てられ、かつての港の石垣は残っておらず、近代的な漁港になっている。

かつては大きな港で、重要な連陸浦の1つであった明月浦は、朝鮮後期には目立たない地味な港になってしまっていた。それを「明月操點」と「明月試射」の2枚は明確に表現しているのである。

#### 4. 済州島人のための港と統治のための港

『耽羅巡歴図』の「漢拏壯囑」には79か所の港が記されている。これは権力が少なくとも79か所の港を確認しているということである。ただし、これはすべてを管理していることを意味しない。この島にやってくるソウルからの牧使たちは、この島を岩だらけで船を泊めるところもなく、この地を知らないものが船を操れば簡単に難破してしまうと恐れていた<sup>14</sup>。彼らからすれば79か所の港のほとんどは大小さまざまな火山岩がごろごろした危険なところであった。ここに、済州島人の考える港観と統治するものが管理しようとする港観のギャップがあった。先に述べた連陸浦としてあげられている港と、それと重なりながら『耽羅巡歴図』の画材とされたいくつかの港は、権力にとって管理下に置くべきものと観念されたのであろう。一方、それ以外の数多くの港は、大きな船で近づくには

確かに危険であったが、濟州島の人々にとっては生活に欠かせない重要な港であった（図12）。

例外的に権力に把握されていた連陸浦と『耽羅巡歴図』で画材とされた港について、簡単に整理しておこう。

朝鮮前期およびそれ以前を古い時代とし、朝鮮後期を新しい時代とする。連陸浦という捉えかたでは、古い時代から新しい時代まで通じてそのように認識されていたのは

朝天浦・涯月浦、古い時代のみなのは明月浦・咸徳浦、新しい時代のみなのは禾北浦・魚登浦（於等浦）・朝貢川であった。当然、朝鮮後期に位置づけられるが、『耽羅巡歴図』の画材としてもっとも存在感が強く表現されていたのは禾北浦（別刀浦）で、朝天浦（舘浦）がそれに続き、涯月浦はかなり希薄になる。東の別防鎮と西の明月鎮は政治軍事的にきわめて重要な拠点でありながら、別防浦が小規模に描かれるにすぎず、明月浦にいたっては存在すらしていない。

いずれにせよ、濟州島に数多くの港が存在したことは間違いない。権力はそのなかのほんの一部にしか興味を持たなかったようである。



図12 ピルレツゲ。このような港がかつては濟州島各地にあった。

#### <参考>

『新增東国余地勝覧』巻38（濟州）のなかの港

#### <濟州牧>

##### 「山川」

- 明月浦：在州西六十里（元の殘党を討つ崔瑩に関する記述がある）
- 板浦：在州西九十五里
- 北浦：在州東四十五里（塩田に関する記述がある）
- 泥浦：在州西九里
- 道道里浦：在州西十里
- 貴日浦：在州西二十七里
- 高内浦：在州西四十里

- 帰徳浦：在州西四十七里
- 独浦：在州西六十一里
- 盃令浦：在州西六十三里
- 咸徳浦：在州東三十一里
- 於等浦：在州東六十四里
- 道衣灘浦。在州東七十二里

「関防」

- 朝天館防護所：在州東二十六里
- 金寧浦防護所：在州東五十一里
- 都近川防護所：在州西十七里
- 涯月浦防護所：在州西四十二里
- 明月浦防護所：在州西六十里（新增に「正徳庚午」＝1510年に飛揚島が倭船の泊りになっているため、城を築いたとある）
- 巾入浦水戦所：在州東北一里
- 朝天館浦口水戦所
- 金寧浦口水戦所：已上三所属左舩
- 伐郎浦水戦所：在州西二十歩
- 都近川浦口水戦所
- 涯月浦口水戦所
- 明月浦口水戦所：已上四所属右舩諸所皆有戦船又有軍更番分戍凡貢膳輪輸渡海旌義大静同
- （新增）別防城：在州東七十五里石築周二千三百九十尺高七尺東北有門（「正徳庚午」＝1510年に牛島が倭船の泊りになっているため、城を築いたとある）。

「宮室」：朝天館（三邑、すなわち済州牧、旌義県、大静県から陸地に向う者は皆ここで風をうかがい、全羅から三邑に入る者は皆ここか涯月浦に舟を停泊させる）。

『耽羅志』のなかの港

李元鎮『耽羅志』（1653年）

「済州」の「山川」項のなかに列挙されている港（旌義県・大静県は省略）

- 健入浦：在州東北一里



- ◇ 參考：山底川：在城東一里即嘉樂泉下流流二里許入海為健入浦今在城內
- 禾北浦：在州東十里
  - ◇ 參考：禾北川：在州東十三里旱竭雨漲浦口有候風館
- 朝天浦：在州東二十五里
- 咸德浦：在州東三十一里
- 北浦：在州東四十里
- 金寧浦：在州東五十里
- 魚登浦：在州東六十里
- 敦義嶼浦：在州東七十二里
- 伐浪浦：在州西一里
  - ◇ 參考：屏門川：在州西城外末流為伐浪浦
- 大瓮浦：在州西二里
  - ◇ 參考：大川：在州西二里末流為大瓮浦其下有龍湫深無底長百步余旱則禱雨有応
- 道円浦：在州西十二里
- 朝貢浦：在州西二十里
  - ◇ 參考：朝貢川：在州西二十里一名水精川一名都近川州人語洪故朝貢之音訛而為都近川之上流瀑布飛流崇十尺其下伏流至七八里湧出石間遂成大川下有深淵有物狀如韃狗潛伏變化示人宝物攬入淵中此川諸川中之大者末流為朝貢浦
- 貴日浦：在州西二十五里
- 高内浦：在州西三十五里
- 涯月浦：在州西四十里
- 婦德浦：在州西五十里
- 明月浦：在州西六十里崔瑩討哈赤時牧子迭里必思等以三十余騎拒於此浦大軍齊擊大破之朝元時候風於此凡七晝夜乃涉大洋
- 瓮浦：在州西六十一里
- 排船浦：在州西六十五里
- 板浦：在州西七十五里
- 釜浦：在州西八十里各浦古有監考今廢只朝天浦禾北浦有監考又有梁直？議察浦只

## 出入之人

以上、二十一の港の名前が記されている。

上記港のなかで城郭があるところ

- 邑城：健入浦
- 朝天城：朝天浦
- 涯月城：涯月浦
- 別防城：なし
- 明月城：明月浦

上記港のなかで防護所があるところ

- 朝天所：朝天浦
- 別防所：なし
- 涯月所：涯月浦
- 明月所：明月浦

上記港のなかで水戦所があるところ

- 禾北浦
- 朝天浦
- 魚登浦
- 涯月浦
- 明月浦

## 『増補耽羅誌』のなかの港

- 健入浦：在州東北一里
  - ◇ 参考：山底川：在城東一里即嘉樂泉下流流二里許入海為健入浦今在城内人尽汲於此（補）南槎錄嘉樂貴泉發源即成大溪曠旱不渴○略○略
- 禾北浦：在州東十里
  - ◇ 参考：禾北川：在州東十三里旱竭雨漲浦口旧有候風館今置防護所
- 朝天浦：在州東二十五里
- 咸徳浦：在州東三十一里
- 北浦：在州東四十里

- 金寧浦：在州東五十里
- 魚登浦：在州東六十里
- 敦義嶼浦：在州東七十二里
- 伐浪浦：在州西一里
  - ◇ 参考：屏門川：在州西城外末流為伐浪浦
- 大瓮浦：在州西二里
  - ◇ 参考：大川：在州西二里末流為大瓮浦其下有龍湫深無底長百步余旱則祈雨有  
 応
- 道円浦：在州西十二里
- 朝貢浦：在州西二十里
  - ◇ 参考：朝貢川：在州西二十里一名水精川一名都近川州人語洪故朝貢之音訛而  
 為都近川之上流瀑布飛流數十尺其下伏流至七八里湧出石間遂成大川下有深淵  
 有物狀如韃狗潛伏變化示人宝物攬入淵中此川諸川中之大者末流為朝貢浦(補)  
 南槎録余
- 貴日浦：在州西二十五里
- 高内浦：在州西三十五里
- 涯月浦：在州西四十里
- 帰徳浦：在州西五十里
- 明月浦：在州在州西六十里
- 瓮浦：在州西六十一里
- 排船浦：在州西六十五里
- 板浦：在州西七十五里
- 釜浦：在州西八十里各浦古有監考今廢只朝天浦禾北浦有監考又有梁直樓？察浦只出入  
 之人

以上、二十一の港の名前が記されている。

- 
- 1 高橋公明「島を見る目と島からの視線」（歴史学研究会編・羽根田正責任編集『港町の  
 世界史3 港町に生きる』青木書店、東京、2006年）267－295頁。
  - 2 高光敏『済州島浦口研究 歴史・民俗学的接近』（韓国語）図書出版カク、済州市、2  
 004年、294－298頁。
  - 3 李衡祥（書）・金南吉（絵）『耽羅巡歴図』済州市、2000年（1994年初刊）。
  - 4 李増『南槎日録』、注2の高光敏書の末尾に掲載された影印本より引用。李増は167  
 9年（肅宗5）に巡撫御史として済州島に行き、12月7日から翌年の4月4日まで滞在

---

し、多くの港を調査した。その記録が『南槎日録』である。

5 『高麗史』「地理」巻57（韓国学文献研究所編『韓国地理志叢書 全国地理志①』ソウル亜細亜文化社、ソウル、1983年）74頁。

6 『高麗史』列伝（国書刊行会編『高麗史 第三』国書刊行会、東京、1977年）巻104、223頁上。同前巻113、377頁上。「地理」以外については影印本が手元にないため、刊本を用いた。

7 『世宗実録』「世宗地理志」巻151（国史編纂委員会『朝鮮王朝実録 5』探求堂、1980年）667頁下左－668頁上右。

8 『訳注耽羅志』（韓国語）図書出版プルンヨクサ、ソウル、2002年。本書は国立中央図書館所蔵本の影印本を収めている。

9 『増補耽羅誌』は天理大学図書館所蔵で、年代比定は「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流—済州島を中心に—」（韓国文化研究振興財団『青丘学術論叢』第19集、東京、2001年）の藤田明良執筆分の14－16頁より。

10 『新增東国輿地勝覧』巻38（韓国学文献研究所編『韓国地理志叢書 全国地理志②』ソウル亜細亜文化社、ソウル、1983年）682頁。

11 高光敏『済州島浦口研究 歴史・民俗学的接近』88頁。

12 『新增東国輿地勝覧』巻38、682頁。

13 前掲高光敏書、225頁。および、現地での高光敏の説明。

14 前掲高光敏書、41－42頁。